



Title	<紹介>盛田帝子・ロバート・ヒューイ編 盛田帝子・松本大・飯倉洋一 校注・訳 『江戸の王朝文化復興 ホノルル美術館所蔵レイン文庫『十番虫合絵巻』を読む』
Author(s)	加藤, のん
Citation	語文. 2024, 123, p. 45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100245
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

盛田帝子・ロバート・ヒューリイ編

盛田帝子・松本大・飯倉洋一校注・訳

『江戸の王朝文化復興

ホノルル美術館所蔵レイン文庫『十番虫合絵巻』を読む

加藤のん

「十番虫合」は、天明二（一七八二）年に催された物合で、王朝古典を主要出典とする洲浜を作り、鈴虫・松虫を鳴かせて、和歌と虫の鳴き声を競つた。十八世紀後半に流行した尚古主義・好古主義の一環として位置づけられる。ホノルル美術館所蔵『十番虫合絵巻』は、「十番虫合」に出座していた三島景雄が記録・編集した絵巻である。本書は、画と本文を解説することで、江戸の人々が、王朝文化への憧れから古典知を抽出し創造した様を明らかにする。また、本書は、和歌の英訳等を収録し、海外における日本文学研究の一端を示すものである。

本書は三部構成である。第一部には、影印、校訂本文および現代語訳、注釈、解題等が載る。判詞や作り物（画）の趣向も詳細に解説することで、典拠の多くが王朝古典にあることや、歌合に連続性を持たせていることを明らかにしている。単なる注釈に留まらず、まさに「読む」という副題にふさわしい内容である。

第二部には、十三の論考やコラムが載り、本絵巻の論点を複数提示する。例えば、絵画上の視点からは関係者の知識嗜好を明らかにし、歌合や物合の歴史的な変遷の視点からは同時代における

知的遊戯のあり方を示す。さらに、和歌の表現技法に關して『源氏物語』や『和漢朗詠集』等の平安文学の近世における受容の観点から論じる。また、本書には海外の共同研究者らによる論考・コラムも載る。専門とする時代や分野の異なる執筆者たちが日本近世文学を越境した広い視点を提供しており、興味深い。

第三部には、付録として、人物解題、校異、類題和歌が載る。綿密な資料は、今後の本絵巻の研究、および同時期の和歌作成の過程や特徴を明らかにする一端になるものと言える。

そして、巻末には和歌や注釈、コラムの英訳等を収録する。これは本書が国際的な研究の成果である所以だろう。加えて、英訳は解釈を補完するものもあると評価したい。例えば『十番虫合絵巻』の英訳『A Match of Crickets in Ten Rounds of Verse and Image』は、本絵巻が和歌や画それぞれが単体で成り立つものではなく、統合的に「読む」必要があることを示している。

本書は『十番虫合』という近世期の王朝文化復興の活動を、多くの視点から検討し、特徴を明らかにした。このような姿勢はある作品を多角的に「読む」ことの魅力や重要性を、研究者のみならず一般の読者に対しても伝えるものと言えるだろう。

（文学通信、二〇二四年三月、三八四頁、二、八〇〇円+税）

（かとう・のん 本学大学院博士後期課程、日本学術振興会特別研究員）